



佐々木雄一郎さま

『ノラネコぐんだん パンこうじょう』

工藤ノリコ 著
白泉社

「男性はすぐに父親にはなれない」というフレーズを目にしたことがある。

初めての子どもが我が家に生まれたとき、私は三十七歳になっていた。独身が長かったこともあって、家事はひと通りできるつもりだ。ただ、家事と育児は違う。家事はタスクを終わらせることを目的にすればいいが、育児はシステムチックに進まないし、そもそも明確な終わりもない。

絵本の読み聞かせもそうだった。一歳の息子に本棚から好きな一冊を選ばせて、隣でページを開き、なるべくゆっくりと落ち着いた声で読み進める。息子は、絵本のイラストを真剣な目で見ている。けれども、反応は薄く、読み終える頃にはわずかな喉の渇きだけが残った。

そのうちに、息子は妻のもとで絵本を読んでもらうようになった。それを見て、私は嫉妬してしまった。自分の読み方では、つまらないのだろうか。

そんな矢先に、『ノラネコぐんだんパンこうじょう』という面白い絵本に出会った。夜の静寂に紛れて忍び込み、見よう見まねで勝手にパンを拵えようとする。結果的に、パン焼き釜の爆発で工場を木っ端微塵にしてしまう——そんな顛末には、静と動の面白さが色濃く詰まっていた。

その日、私は息子を膝に載せて読み聞かせを始めた。大事なのは臨場感だ。物語の中盤、大きく膨れたパンが焼き釜を膨張させる辺りで、膝を少しずつ揺らし始める。揺れを次第に大きくさせ、見開きに「ドッカーン！！」と書かれたページを開いた瞬間、ふわりと、跳ね上がるように息子の体を浮かせた。

息子は笑った。キャツキャツと声をあげて、いつまでも笑っていた。

この瞬間、私は少しだけ、父親に近づくことができた。

現在、息子は三歳になったが、今でもこの絵本がお気に入り、読み聞かせをせがむ際には必ず私の膝の上に乗ろうとする。あの日より重くて大きくなった体でも、私はいつまでもふわりと浮かせられるはずだ。